

現場で使える！研究成果

表 肥育前期の粗飼料摂取量と枝肉成績

	粗飼料摂取量 (乾物 kg)	出荷体重 ³⁾ (kg)	枝肉重量 (kg)	4・5等級率 (%)
慣行区 ¹⁾	562.0	817.0	522.4	100.0
育成前期多給区 ²⁾	621.0	867.3	552.4	100.0

- 1) 慣行区：濃厚飼料を日齢に応じて増給し、240日齢で5kg/日を給与する区
 2) 育成前期多給区：濃厚飼料を135日齢をピーク(4.5kg/日目安)として増給し、その後漸減して195日齢以降は4kg/日に制限する区
 3) 両区とも27ヵ月齢で出荷

黒毛和種

濃厚飼料を育成前期に多給 後期に制限→枝肉成績向上

粗飼料を摂取する子牛



本県の黒毛和種肥育で、肥育前期(9～13・9ヵ月齢)に濃厚飼料の給与量を制限し、良質粗飼料を多給することで飼料の利用効率を高め、良好な発育と枝肉成績を得る「長崎型新肥育技術」の普及が進んでいる。

一方、生産現場では、肥育前期に粗飼料を十分な量摂取できない事例も散見される。これは体重が重視される子牛市場に対応するため、出荷前の子牛に濃厚飼料が多給される傾向にあることが要因の一つと考えられる。

そこで、黒毛和種去勢牛を用いて濃厚飼料を育成前期(90～179日齢)に多給し、後期(180～269日齢)に制限する給与方法がその後の肥育期の粗飼料摂取量と発育や枝肉成績に及ぼす影響を検討した。

その結果、肥育前期の粗飼料摂取量が

長崎型新肥育技術への移行

増加し、24ヵ月齢以降で増体が向上して枝肉重量が大きくなる傾向にあった。また、4・5等級率に差はなかった。

長崎型新肥育技術にスムーズに移行できる子牛の育成技術として、肥育経営・繁殖経営双方の所得向上につながるもの期待できる。

(県農林技術開発センター 畜産研究部門・横石里紗)